

## 日英語の意識構造の相違

—英訳「細雪」をめぐる—

四方田 敏

「人間は言語によってはじめて人間である。しかし、言語を持つためにはまづ人間でなくてはならない」これはラッポルトの言葉であるが、人間の存在と言語とがいかに不可分な関係にあり、言葉というものが最も人間的なものであると言うことを如実に言い表わしていると言えよう。このような言語と人間の不離不可分の模様についてはかの聖書の「創世記」にも言及されている。神は塵から作られた人間に息を吹きこんだのである。つまり人間はこれによって靈魂を与えられた。そしてこの靈的存在としての人間は人間の言語という誰れにも自明な形で現われると考えられた。創世記はこのことを「アダム（人間）は他の動物に名を付けた」と表現している。

このような言語は単なる言語学者にとってのみ興味の対象となるものではないであろう。よく考えれば人間誰れしも言葉には興味を覚えるはずのものである。古代の素朴な人たちにもこの言葉に対する関心があった。「万葉集」の山上憶良の歌<sup>(1)</sup>に「そらみつやまとの国は、すめがみのいつくしき国言靈の幸はふ国と語り継ぎ、言い継がひけり」がある。

そして「創世記」の中の言語の記述を言い、また、この山上憶良の「言靈」と言い、人間との関連において何か共通した意識があるような気がするのである。

英語と日本語の意識の相違というようなテーマは決して真新しいものではないのであるが、筆者にとってはまだまだ未知な事柄がいっぱい有るような気がする

のである。

筆者が谷崎氏の「細雪」を小論の素材として選んだ動機は Seidensticker 氏が *The Makioka Sisters* としてあらわした「細雪」の英語による名訳があったからである。現代の日本文学の世界で最高峰の位置を占めるもっとも散文らしい散文小説、典型的な日本的感情と精神を具現している「細雪」、あらゆる芸術の中でもっとも人間的言語を媒介として表現され、創造される文学を他方、英語という全く異質のこれもまた言語で翻訳を通して比較することは有意義であり、また楽しい限りである。

## 1. 論 理 性

英語が論理的思考からくる論理的表現に向かう傾向があることをこれから見てゆくことにしよう。英語の基本的定型をなすものは主語＋動詞であり、これはゆるぎない強靱な関係を持って引き合っており、日本語と比べると本質的に厳しい論理関係をなしている。例えば「細雪」の中の「いったい今年は春に雪子の見合いの件があってから、五月には舞の会があり、引き続いてあの大水害、妙子の遭難、おきく師匠の逝去……」と今迄、随分いろいろな事件が多かったのに」は次のように英訳されている。

It had been an eventful year; Yukiko's miai in the spring, the dance recital in June, the flood and Taeko's narrow escape, the death of the dancing teacher.

みられる通り日本語では「今迄随分いろいろな事件が多かった」と一番終りにくる箇所が英語では *It had been an eventful year* と書かれて最初におかれる。そして日本語では文の中ほどに書かれている「雪子の見合い」などの事柄が英語では *an eventful year* のあとにセミコロンを置いていわばその内容を具体的に叙述すると言う方法で並置されるのである。つまり一種の<sup>(2)</sup>演繹法の形をとるのである。

また「水谷にして見れば、此の姉妹たちは少し思い上りすぎている。人が熱心

に奔走してやっているのに、いつ迄悠長なことを云ってどうする気だろう、そんな風だから婚期に後れてしまうのではないか、ちと眼が覚めるようにしてやらなければと云う腹があるので」は次のように英訳される。

She felt that she really had to awaken these sisters to the fact of life. They were a little too fond of themselves ; they continued to lounge about while people were not working for them. Hence Miss Yukiko's difficulties.

この文の中では井谷のもっとも憤懣やる方ない気持は「ちと眼が覚めるようにしてやらなければ」に集約していると言える。そして英語ではこの部分が日本語と逆に井谷の気持の表現として最初に述べられるのである。そして井谷をして、このような不快に至らしめた原因といえるものがその後には叙述されると言う演繹的な表現法となるのが判る。そしてこの種の表現法は *The Makioka Sisters* では珍らしくはない。もう少し例示すると、

「幸子の夫の貞之助は、計理士をしていて、毎日、大阪の事務所へ通い、厳格一方の本家の兄と違って、商大出に似合わず、文学趣味が本家の兄のような監督権を持たなかったし、雪子たちには、そう恐くない人なのであった。」

この英訳は以下の如くである。

Sachiko's husband Teinosuke was so much less frightening than Tatsuo in the main house. Teinosuke, an accountant who worked in Osaka, was quite unlike the stern, stiff Tatsuo. For a commercial-school graduate, he had remarkable literary inclinations.

見られる通り、「雪子たちにはそう恐くない人なのであった」は日本語では最後に来ているのであるが、英語では最初にくる。まさに対照的な発想のあり方を示している。これによってみると日本語の思考の型およびその言語的表現において一種の帰納法をとる傾向があると言えるのである。

また「或る時幸子は『お宅のこいさんが奥畑の啓坊と夙川の土手を歩いてはったのを見た』と云って注意してくれた人があったのではとした」このように引用文の中にさらに引用部分を挿入してはばからない日本語は正に膠着語としての

特色を発揮していると言える。ちなみにこの文は次のように英訳されている。

One day Sachiko was startled at a bit of news she heard from an acquaintance: "I saw you Koi-san and the Okubata boy walking by the river."

谷崎氏の文章で特に目立つのはその文章の調子であるかと思われる。氏<sup>(3)</sup>は「文章に於ける調子は、その人の精神の流動であり、血管のリズム」であると述べている。すらすらと水の流れるように文章がつづいてゆくのは、主語を書き表わさなすことのできる日本語の特質のためであると思われる。それはまた述語動詞を「と」とか「て」または「に」のような助詞でつなげてゆくことのできる日本語のなし得る業である。こうして表わされる日本語の文章のリズムは英語のリズムとは本質的に異なるものである。

「こいさん、頼むわ……」鏡の中で廊下からうしろへ這入って来た妙子を見ると、自分で襟を塗りかけていた刷毛を渡して其方は見ずに眼の前に映っている長襦袢姿の抜き衣紋の顔を他人の顔のように見据えながら……」は次のように英訳される。

'Would you do this; please, Koi-san?'

Seeing in the mirror that Taeko had come up behind her, Sachiko stopped powdering her back and held out the puff to her sister. Her eyes were still on the mirror, appraising the face as if it belonged to some one else. The long under-kimono, pulled high at the throat, stood out stiffly behind to reveal her back and shoulders.

見られる通り、英語では文章がずっと長くなり、よどみなく流れるような日本語のリズムは出されない。どんな名訳でもそれは出来ないことである。日本語のリズムは平坦なリズムであるのに反し、英語のそれは強弱に基づく波形の別種のリズムだからである。

「姉の襟頸から両肩へかけて、妙子は鮮かな刷毛目をつけてお白粉を引いていた。決して猫背ではないのであるが、肉づきがよいので堆く盛り上っている幸子の肩から背の、濡れた肌の表面へ秋晴れの明りがさしている色のつやは、三十を

過ぎた人のようでもなく張りきって見える。この英訳は、

The bright puff moved from Sachiko's neck down over her back and shoulders. Sachiko was by no means round-shouldered, and yet the rich, swelling flesh of the neck and back somehow gave a suggestion of a stoop. The warm glow of the skin in the clear autumn sunlight made it hard to believe that she was in her thirties.

日本語の「が」と言う反語の意味を表わす助詞は反対の概念を論理的にみちびくと言う点においては薄弱で中途半端に終わらせてしまう傾向がある。英語はその点反語的概念を明確に表示する。例えば「決して猫背ではないのであるが、肉づきがよいので堆く盛り上っている幸子の肩から背の……」は英語では、

Sachiko was by no means round-shouldered, and yet the rich, swelling flesh of the neck and back somehow gave a suggestion of a stoop.

この点、日本語は情緒的で、論理に対して無頓着な面が目立っていると言える。

しかも英語では無生物 *flesh* を主語にして *gave a suggestion of a stoop* と言う表現をとっていて、これを原文の谷崎氏の日本語と対照すると、その感性的な平面性に対して、物を主語とする無機的な表現に切り替える英語の立体性がみられる。

「ええと独逸の娘ちゃん、あんさんのお名前何とやら云やりましたな……」の英訳は、

"Little German girl—I am sure someone told me your name."

この場合、日本語の意識では *someone* のような第三者のことは念頭にはない。そして、日本語では「私自身」に関することとして主観的にしか考えない、「あんさんのお名前何とやら云やりましたな……」に見られる如く「ほかし」の表現である。「あんさんのお名前何とやら云やりましたな……」はすべて述語に属する部分である。つまりこの文は無主語文である。

また、われわれ日本人は日本語をなんとなく分っている（それも自分だけに分っている）というように、直観的に使用している場合がある。

「それでどんな話」「大体え、話やねんけど……、ま、彼方へ来なさい」と貞之助は幸子を書斎へ連れて行って語った」は下のように英訳される。

“What did she have to say?” “It was good news for the most part. But we ought to go out where no one will hear us.” He led the way to his study.

上に見られる通り、「彼方へ来なさい」は英語では *we ought to go out where no one will hear us.* となって、日本語では言い表わされなくて、かくれている部分が英語では顕現的に明確化を求める傾向があることが分る。もう少し例示すると、

「ボリス」と貞之助はしょざいなさそうにいて屈んで背筋を撫でてやったりしていた。この英訳は下の通り。

“Boris,” said Teinosuke, for want of any one else to talk to. He stroked the dog’s arched back.

ちなみに今「大和英辞典」(研究社)で「所在ない」の英訳をみると *be ennuied (=bored); have nothing to do; time hangs heavily on one’s hands; not knowing what to do with oneself* と出ている。いわばどれも何か抽象的な表現で終わっているように思える。「辞典」というものの性質上そうなるのであろうが、一般的な訳ですましている。

しかし E.G. Seidensticker の訳によると、*for want of anyone else to talk to* が「所在なさそうに」にあてられる。日本語では「所在なさ」と言う表現に情感がこめられている。その内容を細く、具象的に表わすことを必要としないし、漠然としたところに言葉のニュアンスを与える傾向がある。しかし、英語は具体的な場面や状況に対応した表現を要求する傾向が強いように思える。その辺のところをもう少し例文を示しながらみてゆくことにする。

「野村さんがあないにしゃべらはるのん、今まで見たことあれへんなんだ、やっぱり綺麗な人が傍にいたはったせえやねんな」

I have never seen him talk so much. It was because he had a young and

beautiful audience.

日本語では「傍」にいたと言うところを英語では he had a beautiful audience と表わす。傍にきれいな人が聞き手として居てくれたからと考えるのはたしかに理屈に合った考え方である。日本語はそこ迄考えて表現しない。「きれいな女が傍に居たと」言うだけで充分である。これに反し、英語には、合理性を重んずる傾向がある。

「住吉川は大変な出水で渡れるところではないさうだから、まあ此処へ上って来いと云うので貞之助は仕方なく彼等と一緒にその汽車の中へ上り込んだ」

The Sumida River was terrible; there was no crossing, why not get on the train and wait? Teinosuke gave up any thought of going farther and climbed in with them.

日本語の「仕方なく」は抽象的な表現で事足りるが、英語では gave up any thought of going farther となって具体的表現が重視される傾向が見られる。

「昨日はどんな工合やった?」「昨日はえらいあっさりすんでしまつてん」、二分もたった時分に思い出したようにぼつんと云った」

“What happened yesterday?” she asked in a low voice. After a minute or two, as though she suddenly remembered that a question had been put to her, she answered. “It was over in a great hurry.”

‘思い出した’が英語では she remembered that a question had been put to her のように何を思い出したかその内容を明確化する必要があるが日本語は主体と客体の未分化のような状況的な表現で事足りる。

「えらい早いお立やわな、此の間来たばかりやんのに」の英訳は

“What a hurry to be off. It seems as though you just arrived.”

「此の間来たばかりやんのに」が英語では「今しがた来たように」と仮想的思考でとらえられ、時間に対する意識がより厳しく、客観的である。これに反しては日本語は見られる通り、漠然とした主観的意識でとらえられるのである。

また次のような情況のことを考えてみよう。例えば、ある婦人が電車の中でバ

ンドバッグからコンパクトをとり出して鼻のあたを叩いたら、他の乗客にくしゃみが出たので、あとでそのくしゃみをした人がそういうことがあるものかと女のの人に尋ねた時、その女の人が「あは……それはその時、あなたの鼻がどうかしていらしたんじゃないでしょうか。コンパクトのせいかどうか分かりませんわ」と言う。これは下のように訳される。

“There must have been something wrong with your nose. I'm not at all sure it was the powder” と答える。日本語では“コンパクト”のせいと表現しておしろいの粉が原因であるのにその容れ物のせいになっているようない方をする。つまり“おしろいの粉”に密接な関係を有する compact で表わしている。これはつまり metonymic expression (換喩的表現) と称せられるものである。これに反して英語では powder というほんとうの事物で言及する即物的表現をとっている。また日本語のいい方としては“コンパクトのせい”と述べて、この“せい”で原因や理由を表わしているのであるが、英語では it was owing to the powder とか it was because of the powder とわざわざ言わないで、it was the powder と直截的な表現ですましてしまうことができるという点も注意すべきである。このことは“カタリナは此の前会うた時分より女っぷりが一段上ったのと違うか知らん”と貞之助よがいったのに対して妙子が“そんなこともないねんけど、お化粧の工合やわ”と言う件があるが、これを英語では “It was just her make-up” とされる。

これも前述の説明と同様英語では即物的なきびしい表現になっているのが面白い。

また次のようない方も注意に値すると思われる。鶴子が幸子に子供たちがまつわりつくのを叱って“叔母ちゃんのべべが皺になるがな”と言う件があるが、これは see, they were getting their aunt all wrinkled と英訳される、のである。Curme の *Syntax* p. 99 によれば目的語はしばしば metonymic であって真の目的語ではなくしてそれと密接な関係を有する物を示すと言われる。つまり He wiped off the dust の the dust は真の目的語であるが He wiped off the



table の the table は metonymic object (換喩的目的語) である。日本語でも剃髪することを“頭を剃る”と言い、黒板の文字を消すことを“黒板を消す”と言う。日英両言語にも metonymic object の表現があるのであるが、上述の例のように they were getting their aunt all wrinkled のようないい方は日本語では絶対に不可能ない方である。

英語にも日本語程でないことは勿論であるが論理的でない表現も存在している。

「ローゼマリとフリッツはむづかしい顔つきで黙りこくっていた」の英訳は Fritz and Rosemarie sat in *stern silence* である。stern silence が注意さるべきである。

「僕のは女達を集め無邪気に酒を飲むだけだ。決して節操を汚すようなことはしないから、それは信じてくれ」の英訳は、

He wanted her to believe that he only had an *innocent drink* or two with the ladies, and that this in no way marred his chastity.

「悦子はもうあと14.5分しかないと思うと気が気でなく、ただ素晴らしく贅沢な船であったこと、何度も階段を上ったり下ったりしたことぐらいしか覚えていない」

With only a *nervous fifteen minutes* to spare, however, Etsuko remembered little afterwards except that every thing was wonderfully luxurious and that she climbed up and down a great many stairs.

斜体字の stern silence と言い、innocent drink と言い、はたまた nervous fifteen minutes と言い、修飾語と被修飾語との関係が論理的なつながりを示していないことは日本語と対照してみるまでもなく自明である。innocent も stern も nervous も理屈の上では人間の様子や態度を表示しているのであるが、矢張り、英語には形容詞と名詞との間に引力が働いてそれらを連結させ、飛躍的な感覚表現を創り出す力があるようである。

日本語が動作的に表現するところを英語では状态的に静的に表現する場合もある。

「女中が出たので雪子さんがいらしたら出て下さいというと、いますとって引っ込んだきりどういう訳かなかなか雪子さんが出て来ない」

The maid who answered the telephone said that Yukiko was at home, and then there was no Yukiko.

「電話に出て来ない」の英語が there was no Yukiko であるのは思いぎった直截的な表現となっている。固有名詞 Yukiko が no によって直接に否定されている激烈な表現は日本語には決して存在しないのである。

更にまた、論理的には好ましい意味を表わす succeed と言う語が好ましかざる事柄に対して用いられる場合が英語にある。鮮やかな逆説的な皮肉の表現である。

「しかし、その時も当てが外れて雪子も妙子も彼に悪い感じを持った」

But whatever his motives, he *succeeded in displeasing both Yukiko and Taeko.*

「結果から云えば、奥畑の干渉が一層二人を接近させてしまったのであった」

Thus Okubata *succeeded in bringing them together.*

「今日は幸子が氣勢が上らず、貞之助も亦、妻の気分に影響されて多少陰鬱になっていた」

Tonight Sachiko quite lacked spirit, and only *succeeded in passing something of her apathy on to her husband.*

「義妹が今日迄、結婚出来なかったのは彼女を取り巻く一家一門の者共が大した家柄でも何でもないので格式とか由緒とか云うことを口にして良い縁談を皆断ってしまったことそれが原因である」

The people around Yukiko, even though they belonged to a family of little importance, had chosen to be fussy about position and pedigree and had *succeeded in making themselves unpopular* by turning down good proposal after good proposal.

「その提議もさることながらそれも下手をすれば病人に気を廻させる恐れがある」

Though there was much to be said about for the suggestion, they might only *succeed in frightening her*.

斜体字の部分をよめば明らかになるであろうが、これらのいい方は“ironical”な implication を持っていると思われる。

## 2. 比較（対照）の意識

英語表現として注意さるべきことは“比較”の意識が日本語と比べるとずっと sharp であることである。英語の方は比較級は *er*, 最上級は *est*. または *more*, *the most* を原級に前置すると言うように、屈折形が発達している。日本語の方は周知の如く、この“方が”よいとかあっち“より”こっちが悪いとかいうように前者は“方”という単なる漠然とした名詞的表現ですましてしまい、後者は“より”と言う比較の基準を示す格助詞を使って便宜的に比較の意を表わすにとどまるのである。従って日本語における比較の意識が鈍感であるのは当然である。比較の意識が発達していると言うことは対象に対する客観的論理的思考が基底にあると言うことに外ならぬであろう。「細雪」の中巻の部分だけをとり上げて日本語の原文と対照してみると、英語の比較級の多用が明らかになるのである。

「生活の点で全然啓ちゃんと云ふものを当てにしないで行けるだけの、——反対に自分がいつでも啓ちゃんを食べさせて行けるだけの職業を身につけたい」

She meant from the start to have her own independent livelihood—*better* to have a means of supporting her husband.

「兄さん、うちそんなに食べてえしませんねんで、口紅に触らんように少しづつ何遍も持って行くよってにたんと食べてるみたいに見えますねん」

I am really eating very little. It looks like *more* because I have to take such tiny bites.

「力一杯の声で呼んで見た」

She called out *in the loudest voice* she could muster.

「父親は（神戸の office へ）出たり出ないだりしていた」

his trips of Kobe had become *less* frequent.

「貞之助は大体来た時の路を通って帰途に就いた」

he started back over *more or less* the same route.

「前進不可能と見れば何処からでも引き返して来ると貞之助はそう云った」

He would turn back as soon as it appeared that he could go *no farther*.

「鉄橋を渡って少し行くと、線路の上は又水がなくなったが、両側の水面は大分高くなっている」

Beyond the bridge the water was *shallower* again but though the tracks were dry, the water was fairly high on both sides.

「幸子は二、三十分もそうしていたものの又落着かなくなって来たらしく二階へ上って行った」

*No calmer* after twenty or thirty minutes, Sachiko went upstairs.

「その間も雨は恐ろしく降りつづけていた」

The rain was meanwhile *worse*.

「板倉君は今日は見物しに来たのかね。なかなか。見物もさして貰いますけど、写真撮らして貰いに来てまんねん」

And did you come to see the dancing? “Yes, *But more* to take pictures.”  
*less~than* の頻用もまた目につく。

「尤も目見えに来た時から手足がひどく真っ黒で垢じみていることは分っていたけれどもそれは境遇のせいではなくて入浴することや洗濯することの大嫌いな当人の物臭な性質から来ていることが間もなく明らかになったのであった」

Sachiko soon realized that the dirty hands and fingernails were a sign *less* of poverty and hard work *than* of pure laziness.

「露西亞人か、あの人——何や露西亞らしい感じせえへんけど」

Is she Russian? asked Yukiko. Somehow she looks *less* Russian *than*—I hardly know what.

「年増の女はみんな心臓や」

日英語の意識構造の相違

Women that age are all the same. They care *less than* nothing what people think.

上に示した日本の文章を見ても分かるように、日本語では比較の意識などには無頓着で書かれているところを英語では明確な *less~than* の比較の意識で捉えている。そしてこれが日本語の否定の意味——“境遇のせいではなくて”“露西亜らしい感じせえへん”などに対応しているのである。今一例示してみよう。

「雪子なしでも立派にやって行けるのだと云うところを雪子にも世間にも見て置いて貰う方がよいかも知れない」

It would be good to show Yukiko and the world in general that she was something *less than* indispensable.

また *more~than* も同様、多く用いられる。

「明日は都合が悪い云うたら、そんなら明後日は如何です云やはるよってにどうにもいやと云うことは云われへんねん」

I told her I was busy today, and she asked about tomorrow. It was more than I could do to refuse.

「見る見る窓の外の瓦屋根が一面に濡れて、ざあっと云う本降りらしい音に変わった」

But the tiled roofs were already wet and glistening and the pounding suggested more than a shower.

「つくづく厄介な女や思いながら憎む気いせえへんねん」

Even when she seems more trouble than she is worth, I can never be really angry with her.

「兎に角、そんなややこしい話やったら、こいさんが直かに打つかって見ることや、僕はもう御免やで」

In any case, it is more than I can manage. Let Koi-san talk to them herself. No more for me.

*less~than* の *less* がマイナスすなわち「負」の意味を表わすとすれば、*more~*

thanの more はプラスすなわち「正」の意味を表わす訳で、正と負の対立意識が英語では明確であると言える。

そしてこの「負」の意識がいかにも数学的に表わされたのが前に例示した They care less than nothing what people think の less than nothing の形式つまり nothing を zero (0) とすればこれははっきりとマイナスの観念を表わしていると言えよう。

前にも触れたが日本語は比較の意識はほんやりしたものであって情緒的な表現をとるに過ぎない。例えば

「私なんかより雪子ちゃんは、此の間から連日連夜殆ど夜の眼も寝ずに看病していてくれますので、こんな時にどんなに心強いかわれませんか。」このような日本語の構造では私と雪子の比較がぼやけていてははっきりしないように思える。それは「私なんかより雪子ちゃんはどんなに心強いかわれませんか」とつながらないでその間に「連日連夜……以下看病してくれますので」と言うような文句が割り込んで生ずるのである。論理的でない構造であると言える。ついでにこのところの英語による訳文は次のようになっている。

Yukiko has accomplished far more than I. At times like this she is a real tower of strength. She has been up night after night, hardly closing her eyes.

日本語の原文とこの英文を比べてみれば、どちらに“対照”の論理がはっきりと出ているかは説明を要せぬであろう。

更にその外に日本語と比べると英語が論理的な比較の観念を堅持している例文を示そう。

「妙子はそれらの石を宝石函に収めて命より大切にし、アパートへは持って来ないで幸子に保管を依頼していた」

Taeko kept hers (=her jewels) in a box as precious to her as her life. She had left it with Sachiko rather than risk keeping it in her room.

日本語では上例で見られる如く宝石などを“命より大切に”するというような

## 日英語の意識構造の相違

誇張したおよそ非論的な表現が無頓着に使われる傾向が目立つが、これは英語の論理には合わない。英語では、*as precious as her life* のような同等比較の表現が用いられる。日本語では前にも述べたように客観的な比較の意識が弱く情緒的な考え方に流され易いから、「命より大切にする」と言うような不合理な論理が罷り通るのである。

比較に関して特に *more, less* について英語には正負の対立意識が明確にあらわれていると前にも述べたが、この意識は英語にあっては仮想と事実の表現にもつながって行くものがあるのではなかろうか。仮想を「負」とするならば事実は「正」である。矢張り正負の対立意識があるように思えるのである。日本語の仮定と事実の表現にはこのような明らかな意識はみられない。

「その点になると一番丈夫そうに見える幸子が実は悦子と同様に見かけ倒して……」

*Sachiko, on the other hand, would have been taken for the healthiest of the sisters, but her appearance was deceiving.*

日本語では「一番丈夫そうに見える幸子が」をはっきりと鋭く仮定的に捉えることはしないであろう。しかるに英語では *Sachiko would have been taken...* と仮定法過去完了と言う文法形態によって仮定を明示し、*but her appearance was deceiving* と明確に対照させている。

「幸子は穴へも這入りたい心地でシドロモドロの受け答えをしながら聞いていた」

*Sachiko would have liked to crawl away and hide. She could only listen, and now and then offer a hesitant, incoherent answer.*

「貞之助としては幸子の時に案じる程のこともなく（顔のじみが）直った事実を見ているために軽く考えていたせいもあった」

*Teinosuke, remembering the surprising speed with which Sachiko's mark had disappeared, was not as disturbed as he might otherwise have been.*

「貞之助は軽く考えていたせいもあった」が英訳では *Teinosuke was not as*

disturbed as he might otherwise have been となっている。貞之助が心を煩わされぬ程度を彼が幸子のしみが直った事実を見ていなかった場合の心のなやみと比較して述べている。he might otherwise have been が仮定の表現である。ここに仮定と事実、正と負の対立意識がよくあらわれていると言うことができる。上例のような場合、日本語では「貞之助としては軽く考えていたせいもあった」の表現は到底英語のように仮定を含ませた意識として捉えられてはいないと言えるのである。

「婚期に後れていると云ふことも端で見るほど自分では淋しく感じていなかった」

The fact that she had been so long in finding a husband caused Yukiko herself less anguish than others might have supposed.

この「端で見る」というようないい方には仮定の意識なぞおよそ日本語は持っていないと思えるが、英語では others might have supposed のようにはっきりと仮定の意識で捉えているのが興味深い。

しかし次のような文は日本語でも仮定の意味が少しは出ていたと言ってよいであろう。

「昔なら穿きふるした破れものなど捨ててしまったものでございましたが、此の頃では諸事節約を旨と致しております」

In the old days I would have thrown away worn-out stocking, but now we must economize.

「昔なら」と「此の頃では」というような対照的な意味の言葉が明示されている場合には、それに助けられて日本語でも仮定の意味がいくらか出てくるように思われる。「昔なら穿きふるした破れものなど捨ててしまったものでございましたが」の中の「昔なら」「捨ててしまったものでございましたが」に仮定の意識が明らかによみとれるのである。しかし、これはいわば仮定の定型表現に即した日本文である。已に見て来たように日本語の意識ではこのような仮定表現の定型と捉えられない表現が英語では仮定の意識として捉えられて表現されるのである。



仮定の問題はこれ位にして次にすでに述べた“対照”の意識の応用とも見るべき英語の様態に触れてみることにする。

「一体こいさんが、少し低級なところあるのんと違ふやろか、さうかも知れんわな」

Am I wrong in thinking there is something a little vulgar about Koi-san herself?

You may be right, I am afraid.

「違ふやろか」「さうかも知れんわな」では対照の意識がみられないが、英語では Am I wrong...? の wrong と You may be right の right とがあざやかな対照をなしている。

「それでも磯貝医院以来呻き続けてばかりいた病人が尋常な物云いをしたのはその時が始めてであった」

But the moaning animal at Isogai had become a human being again.

ここで見られる通り moaning animal と human being が witty な見事な対照をなして使われている。

次の英語の対話における代名詞の使用の変化は興味深い。日本語の立場と比べるとその代名詞の使われ方に対照的なものがあるように思えて興味を惹くのである。

「どうしたんやろう、お母ちゃん」

「どうしたんやろう」

「何か轢いたんと違ふか知らん」

「そんな様子もないやないか」

「早う動いたらええのんに」

「間が抜けた汽車やわ、こんな所で停るなんて」

What is it, Mother?

I have no idea.

Did we run over something?

Do you see anything?

But they ought to know we are in a hurry.

Silly train, stopping in a place like this.

「何かを轆いたんと違うか知らん」は日本語では主語が示されないが、英語では轆いた主体が *we* で表わされている。この場合、日本語では轆いた物は乗っている機関車と言う“物”であって乗客の *we* と言う意識はないのである。「そんな様子もないやないか」では英語は主語を *you* としているが、日本語ではただ漠然と自分達の置かれている状況のことを考えているだけであって無主語の述語だけの文となっている。「早う動いたらええのんに」では英語は機関士など複数の乗務員の *they* と乗客である *we* とを対照的に表わしている。この場合、日本語的発想からすれば機関車そのものを直観的に念頭において非難していると言えよう。

### 3. S (無生物) + Vt + O (人間) の型

「細雪」の原文とその英訳を対照してみると、英語では表題の如く無生物を主語とし、それが目的語である人間に働きかける形態の表現がかなり多いことが分るのである。これに反し、日本語は本来使役の主体としては人間または人間に準ずる有意の動物に限られるのであって上記の英語のような表現法はないと言える。以下「細雪」の上巻に限っただけでもかなり目につくこの英語の固有の構造の例の若干を引用してみることにする。

「雪子をさしおいて妙子が先づ結婚することは尋常の方法ではむづかしいと見た」

Custom would not allow her to marry before a husband was found for Yukiko.

日本語ではどうしても「尋常の方法では」と副詞にして文を人間を主体にして書かねばならない。

「婚期に後れていると云ふことも端で見るほど自分では淋しく感じていなかった」

The fact that she had been so long in finding a husband caused Yukiko herself less anguish than others might have supposed.

この文で見られる通り、日本語では主体なるものが必ずしも主語になるとは限らない。上記の文は無主語の文である。「自分では淋しく感じていなかった」の「自分では」は私見によれば「主体」に擬せらるべき「擬似主語」とも言うべきものであろう。

「ちょっと、中姉ちゃんまだやろか」

What could be keeping her?

この日本語表現は実に漠然としたいい方のように思える。情緒的な表現とすることができ。物をハッキリと言いつつ、それなりに含みのある表現であると言える。それに反して英語では what を主語にして「何が彼女を引きとめているのだろうか」と言うような論理的な分析的な表現となっている。

「その雑誌の記事を読んだのですっかり安心した訳であった」

The magazine piece put her fears completely at rest.

「それも畢竟此方が余りむづかしいことを云って不釣合により相手を求めようとすると、却って妙な誘惑にかかるようなことになる」

The desire for a match out of all proportion to what they could reasonably expect had the perverse effect dazzling them and throwing them off guard.

「此の間から無闇と話を急いで様子やつたに今の狼狽したような態度を見ると、矢張知っていたのであろうかと思わざるを得なかった」

Her earlier haste and now this confusion, made him suspect that she had indeed.

「黙ると一層空腹が身にこたえるので、何か話題を見付けてしゃべっていなければならなかった」

They really had to think of some thing to talk about since silence only made them hungrier.

「黙ると空腹が身にこたえる」は silence only made them hungrier であ

って、silence という抽象名詞が主語となり、使役の主体となっているのは明らかに分析的であり、日本語と比べるとはるかに知的な思考を表わしている。

「東京弁を使うので、まるで別の人のようで打ち解ける気になれないのであった」

Tokyo speech had made her an entirely different person, Sachiko thought, a person with whom she could not possibly feel at home.

「幸子は叔母が暑い日ざかりに大阪から出て来たのには何か用件があることと察した」

Only important business could have brought her out from Osaka on a hot summer day.

「学校は気分次第にして遅刻や早退させるのはよい」

She should be allowed to go to school late and to leave early as the spirit moved her.

上例の the spirit moved her のように、日本語の場合では一個の人間の中にあるその spirit とその人間そのものを英語のように分析的にみることは決してない。spirit はその人間そのものと合一的にとらえられるからである。

使役の主体としての物を主語にする上例のような構造は「細雪」の英訳の中にはまだ多数みられるのであり日本語と英語との差異を一段と明確にしている特色である。しからばその差異の因ってくるころは何であるか考察されなければならない。

それは対象世界に対する両言語の態度の差異と言う点から考えられるであろう。有生の物のみしか使役の主体となり得ぬと言う日本語の意識は素朴であり、自然原始的である。それは対象世界に密着して、そのままに引っ張られてゆくような受動的な意識と言えるのではないか？ このような意識は古来より日本人の伝統的なもので日本人の世界観をつくっている。例えば、日本人は古来から自然を愛し、自然を友とし、自然に融合しようとする心がある。「徒然草」にも「折節の移りかはるこそ、ものごとに哀なれ」と言う一節がある。いわゆる「もののあわ

れ」の心情である。こちら側から働きかけて行こうとしない受動的な態度である。これに反して、英語の世界に対する態度は日本語のように一元的で、原始的ではない。対象に没入しないで、対象から離れ受身にならないで、こちらからダイナミックに働きかけようとする態度が感じられる。例えば上述した英訳の表現、無生物を使役の主体とする構造は必ずしもこういう構造をとらずに、日本語のように有生物を主語とする表現の形式をとることができるであろう。つまり日本語では絶対に一つの表現でしか書けぬところを英語では二種類の表現で書ける点が大きな相違である。いわば日本語は世界を主観的有機的にナイーブに表現しようとするのに対して、英語は無生物を使役の主体とするようなダイナミックな緊張度の強い構造を選ぶことができるのである。英語が無生物をあたかも有生のように切り替えて思考することができるといういわば比喩への作為力を持っていることは英語が論理的で知的な flexibility を持っている証拠である。

#### 4. 日本語の肯定表現と英語の否定表現の対応

日本語の肯定表現に対して、英語が否定の表現を以て対応する場合がよくある。「細雪」の英訳と対照して見てゆくことにする。

「姉ちゃんのことが書いてあるねん」、「書いてあったかてええ」

“Because I wrote about you.” “You think you ought not to write about me?”

日本語の「書いてあったかてええ」は「書いてある」の過去形であることは明らかであるが、これを要するに主体がはっきりしない日本語の特色を表わしている。「書く」行為および「書く」行為者は問題にされないで「書いてそれがある」と言うようにいわば「存在状況」的な意識でとらえられていると言える。つまり「書いている事実」が存在していると言うように、消極的な受動的な思考を示している。これに反して、英語では you ought not to write のように主体を明確にして「書く」行為が道徳的に善いか悪いかをはっきりさせるように表現する。英語の方がより積極的で動的であることが判る。

「今日、私は図らずも飛んだ御相伴に与かりますような訳で」

I can't help thinking I don't belong here.

これはいわゆる英語の二重否定の構文である。二重否定が用いられたのは控え目なへりくだった感じを表わすためである。

「ですから今日此の様な席へ列しますことは光栄の至りでございます」

Not that I'm not glad to be here.

これも控え目な謙遜したい方であるが、却ってそれなりに光栄の気持を強く印象づけるような効果が現われていると言える。

「私こそ軽率なことを致しまして申し訳もございません。いいえ、そう仰っしゃられては痛み入ります」

日本語の「痛み入ります」は「相手の親切、ていねいに恐縮する」という意味で日本人の遠慮深い性格をよく表わす表現である。これに反し、英語では you mustn't say that と言って相手を主語に立て否定表現による「そんなことを言うてはいけません」と言うような恐縮している自分を出さない客観的ないい方をしている。

英語の方が日本語と比べるとずっと強いひびきを持っているようで、この「痛み入ります」の色合いは英語では出せないと言ってよいであろう。

「うち、やっと事が済んだよってに、大阪へ帰って、当分毎日舞の稽古に通おうと思ってるねん」

I have no more to do on the dolls. In Osaka I can go for a lesson every day.

「やっと事が済んだ」の英語による表現 I have no more to do は日本語に比べると、ずっときびきびして表現が主体的であると思える。

「料理は播半か、つるやと云ったようなことで満足していた」

As for restaurants she wanted nothing better than the Harihan or the Tsuruya.

日本語では「……と云ったようなことで満足していた」というようにほんやり

した表現で、価値についてははっきり言わないのであるが、英語では *want nothing better than* のように比較級 *better than* を使って価値判断意識は日本語よりはっきりした形で出ている。

「よう覚えとき、物識りのこいさんにも似合はんやないか」

*Be sure to remember it. Is it like our Koisan not to know these things?*

日本語では「物識りのこいさんにも」というように総合的な肯定的表現の方が意味が強くなるのであるが、これに対し、英語では「～を知らないなんてこいさんらしくない」というような「知る」ことを否定して分析的に表現しないと強意にならないのであろう。これは日英語の対照を表わしていると言えよう。

## 5. *find oneself* を含む型

*The Makioka Sisters* をみていると表題の型式の表現が案外散見されるのである。この型の表現は辞書の説明によると“気がついてみれば……である”“思いがけなく、突然に、ついに……である”のような意味になると言われる。*find oneself* は英語の特徴を表わす *idiomatic* な表現であると言ってよいであろう。以下、若干例文を示してみよう。

「その外に又作品が相当な値で売れるところから、自然金廻りがよくなった」

*She was able to ask good prices for her dolls, she found herself with money to spend.*

「すぐその場から妙子のことを『先生さん』と呼び出したので」

*Taeko immediately found herself being called “the professor”*

「然るに妙子に同行して東京へ出かければ、否でも応でも本家と妙子との間に立たされる羽目になる」

*Sachiko would find herself in a fight over money, whether she wanted to or not.*

この文では自分の意志に反する事態に巻き込まれることをいやがる気持が主体的に表わされている。日本語では主語がなく、周囲の事情に呑み込まれる人間が

受動態に表現されているに過ぎない。勿論、この場合の *find herself* には受身的な意味合いが含まれていることは否定できないが、英語には人間が自己を分析的に見ようとする厳しい意識が表わされている点が日本語とはかなり相違していると言えよう。

これは「バケツのリレーに駆り出された」の英訳 *She had found herself in a bucket brigade* によると、「自分の意志に反して……させられる」と言う受身の意味が一層はっきりと出てくることが分る。この外

「ついに妙子の云うことを信じさせられていた訳であった」

*Sachiko had found herself believing what Koi-san said.*

「傍から貰へ貰へって云われて盛に小突き廻されると、結局貰うようなことになっちまうかも知れませんな」

*But with someone like you to prod me on, I suppose I'll find myself married again in no time.*

以上の如く「気が進まないで～する」と言う意味を *find oneself* が表わすことがあることが分ったが、これは前述したように辞書にある「自然に、思いがけなく、突然に、ついに……する」の説明よりも射程距離のより長い意味を表わすと言わねばならない。

しかし、いずれにせよ、意に反する事情に立たされた時はもちろん、自己をきびしく分析的に意識し、見る傾向、および自我のよってくる基盤が日本語よりも鋭く、強固であることを、*find oneself* は暗示していると言えよう。

以上考察して来たことを総括的にまとめてみれば、矢張り、世界に対する日英語の認識の差異に帰せられるとすることができると思う。日本語の場合には、世界を全体として総合的に、絶対的に見る意識が強いから、どうしても感性的な認識の傾向が出てくるが、英語の場合は、世界を相対的に客体化してみる意識が勝るから、必然的に分析的な意識の面が強く出てくるとすることができる。

注

(1) 柿本人麻呂も万葉集で「敷島の やまとの国は 言霊のたすくる 国ぞまさきくありこ



## 日英語の意識構造の相違

そ」と詠んでいる。

- (2) 文章構造の面から見れば主語から始まって途中に修飾語をはさみながら述語へと収斂していく日本語は求心構造をまずと考へられるし、主語十述語を核として言葉を拡大してゆく英語は遠心構造であると言える。
- (3) 文章読本 (中央公論社版) p.130

### 参 考 書 目

榎垣 実 「日英比較語学入門」

Curme, G.O. *Syntax*.

Jespersen, O. *Essentials of English Grammar*.

Evans, B & C., *A Dictionary of Contemporary American Usage*.